

篠田太郎氏の講演，合理性と実験経済学に関して

滝脇知也*

キーワード: 経済学, 実験

Group epsilon 2016 4th meeting の二つ目の講演は早稲田大学経済学研究科修士2年の篠田太郎さんが行った。タイトルは合理性と実験経済学というもので、数学、物理、情報系の講演が多いepsilonでは初めての経済学に関する講演であった。

本講演は非常に考えられた作りになっており、まず「実験」をして見せて聴衆の興味を惹いた。そこで行われた実験とは美人投票ゲームと呼ばれるものである。詳しく解説すると興ざめになるためここでは多くを述べない。未体験の方は是非発表スライドを見ていただきたい。すぐに答えの書いてある先に見ずに、自分で予想すると面白い経験ができるだろう。

この実験の重大な示唆はルールに従った「合理的」な判断と実際の結果がずれるというものである。この実際と理論との間を埋めようと試みるのが実験経済学らしい。その重要性は、先ほどの実験をもって聴衆にも容易に実感できた。

本レビューではカッコつきの「合理的」という言葉を用いた。この言葉は経済学のテクニカルタームで一般の意味での合理性とはやや違う意味を持っている。その定義は「行動の選択肢が複数ある状況において、自身の利得を最大化しようと行動すること」だそうだが、しかし有名な囚人のジレンマのゲームにおいて、「合理的」な選択は最悪の結果を生んでしまう。個人的にはこの選択の仕方は合理的というよりも短絡的、あるいは利己的と表現したいところだ。実際にはほどほどの利益で満足したほうが利益は大きい。

もちろん経済学者はその先も考えている。利己的を補完するのは利他性、すなわち協力である。本講演では協力ゲームという、協力によって個人プレイよりも多くの利益が得られるゲームにおける利益分配の方向性が論じられた。特に優加法的、提携合理性、効率性などの諸概念を定義し、ゲームを数学的に厳密にとり扱おうという姿勢は堅実である。実は私はこの講演のタイトルを聞いて、非合理性、すなわちランダム性を取り入れるような定式化を期待していたのだが、良い意味で裏切られた。現実にはそういう不確実な要素も考えなければならないのだろうが、それでは理論の枠組みがこれまでのものから外れすぎて定式化が困難であろう。ここで紹介された協力ゲームに関する数々の理論は定式ができそうな枠内でこれまでのモデルを本質的な意味で改善しており、着実であると感じられた。

本講演はまだ実験経済学の入門を概略しただけで、講演者のオリジナルな仕事まで紹介するには

* 国立天文台助教

至らなかった。講演者の研究はこうしたゲームの解析を理論モデルだけに頼るのではなく、実際に人を集めて「実験」を通して行うことに特徴がある。その結果はいずれ ϵ でも講演されるだろう。結果は非常に楽しみではあるが、聴衆の中からはシビアな指摘もでた。この場合の「実験」は人を集めて行うものであるため、他の科学の実験よりも母集団の特性による差がでやすくなるのは想像に難くない。そうした困難を今度どのように解決していくのかもまた楽しみである。

最後に、講演の内容とは少し離れてしまうが、私の勝手な希望を述べることを許してほしい。アダム・スミスの国富論には以下のようにある。「政治家あるいは立法者の科学の一部門として見た、政治経済学は二つの違った目標を目指している。第一に、人民に豊富な収入または生活資料を提供すること、もっと適切には、かれらが自分たちでそういう収入または生活資料を調達できるようにすること、そして第二に、国家または共同社会に、公共の業務に十分な収入を、供給することである。」このように、どうか発展した経済学を使って、国の経営をうまい協力ゲームにして欲しい。たぶん講演者はこうしたクラシカルな倫理学と不可分の経済学ではなく、科学として経済学を求めているのであろうことは理解できるが、そうした実直な研究の末に是非とも最終的には戻ってきてほしいテーマである。講演者の研究の今後の発展を期待している。